

庭園序説

橋内 武

本稿は「日本の庭園・世界の庭園」と題して吉備創生カレッジ（2007年11月15日・22日・29日の3回、山陽新聞社本社ビル6階のさん太キャンパス）で講じた内容の一部をまとめたものである¹⁾。3回の講義には、①庭園入門・②日本の庭園・③世界の庭園という副題を付けていたが、そのうち第1回のすべてと第2回の一部（現代の庭園）をここに文章化したものである。市民向けの講座であったから、学術的というよりも啓蒙的な書き方になることをあらかじめお断りしておく。

ではこれから、庭園序説という題目で庭園の定義・機能・形式・構成要素・現代の庭園について述べていく。庭園とは何か、庭園にはどのようなたたきがあるか、庭園にはどのような形式のものがあるか、庭園にはどのようなものから成り立っているのか、そして現代の庭園にはどのような傾向が認められるか——これらの問いに簡潔に答えることが本講の目的である。

1. 庭園の定義（庭とは）

庭園とは、「庭」と「園」を組み合わせた和製二字漢語である。「庭」は家屋の前の、あるいは建物で囲まれた、人工空間のこと。「園」は囲いの

* 本学国際教養学部

キーワード：庭園，定義，機能，形式，構成要素

中に果樹が植えられていることを示す。中国語では「園林」という。英語の 'garden' は、'gan' (囲い) と 'eden' (エデン・悦び・楽しみ) の合成語である。だから、庭園 (garden) は、日本では「桃源郷」や「極楽浄土」、西洋では「エデンの園」といった理想郷を連想させる (進士 2005)。つまり、人間の環境の安定化のために造られる「囲い」の一つが庭園である (進士 1987)。

もっとも、日常語としては「庭園」よりも「庭」の方が馴染まれている。庭園名は「○○園」と称するのが一般的である (例、向島百花園、津山・衆楽園、鹿児島・仙巖園)。なお、古語の「林泉」は庭園とはほぼ同義である (京都林泉協会 2002)。中国では「園林」という。「公園」は公衆のために設けられた庭園または遊園地である。これには都市公園と自然公園がある。都市公園の先駆けとなったのは、日比谷公園 (1903年開園) である。2007年7月に開園した札幌のモエレ沼公園はイサム・ノグチの設計による「大地の彫刻」である。自然公園には、国立公園・国定公園・都道府県立自然公園があり、一定地域を指定して地域制公園としている (赤坂 2006)。それぞれ瀬戸内海国立公園、後山国定公園、岡山県立森林公園の例がある。江戸期に作庭された大名庭園は明治以降に市民一般に開放されたため、「○○公園」と称することがある。例えば、栗林公園 (栗林御庭)、水前寺公園 (水前寺成趣園) などの例を想起せよ。

2. 庭園の機能 (庭のはたらき)

庭園にはさまざまな機能 (はたらき) が認められる。ここでは、7つの機能を挙げる。

(1) 宗教的なはたらき (自然崇拜)

岩磐 (いわくら) や岩境 (いわさか) は、神の依代 [神の宿る所] として神聖視されてきた。例えば、阿智神社磐座岩境、神像寺磐座。須弥山・

庭園序説

鶴亀石（鶴石・亀石）・蓬来山・三尊石（阿弥陀三尊・薬師三尊または不動三尊）の石組や神池には、神性・仏性を認めるアニミズム（自然崇拜）の信仰が背景にある。だから、「神苑」には宗教的な意味合いがあるのである。

(2) 眺望を楽しむ

座敷の中または縁側から庭園の正面を観賞する（座観式の場合（龍安寺庭園・建長寺庭園など）であるか、園路を回りながら観賞する（回遊式の場合（岡山後楽園、兼六園、栗林公園など）であるかの違いがある。いずれの観賞法を採るかによって、庭園の意匠・構成が変わってくる。

(3) 風流を味わう

曲水——上流から流される杯が自分の前を過ぎないうちにを取り上げて、詩歌を作り杯を取り上げ酒を飲み、次へ流す遊びのこと。例えば、毛越寺の曲水の宴、松尾大社の曲水の庭を見よ。

野点——庭園で行われる屋外の茶会のこと。緋毛氈を敷き、昼間には大きな赤い和傘を立て、夕べには路地行灯を点す。例えば、花見・仲秋・紅葉刈りには野点を行う。岡山後楽園などでは仲秋の夕べに月見の宴が催される。

(4) 心を癒す

庭園（とくに植栽）には心を癒す効果があり、この点に着目して園芸療法（ガーデン・セラピー）や芳香療法（アロマ・セラピー）などが広まってきた。庭は「癒しの空間」であり、植物を育てる行為から、思いやり・自信・満足感・責任感などが養われるという。

(5) 花や野菜や果物を作る

フラワー・ガーデン（花園）、ベジタブル・ガーデン（菜園）、フルーツ・ガーデン（果樹園）のように、庭で草花や野菜や果物を作って、それらを屋内に飾ったり、食生活に取り入れたりする。目的・用途に応じて、



高野山の福智院庭園（登仙庭，池泉式）

地割り（ゾーニング）をして仕切るとよい。

(6) 遊んだり，運動したりする

ブランコや滑り台や砂場で遊んだり，野球・テニス・バスケットボール・ゴルフのようなスポーツの練習をしたりする。この種の庭をプレイ・ガーデン（遊びの庭）という。

(7) 飲食を楽しむ

野外の食事を目的に炉を設置してバーベキュー（焼肉）を楽しむ。親しい仲間とビールや清涼飲料水を飲み交わし，宴を過ごす。

要するに，庭園の機能とは，人が庭に何を求めるか，そこでいったい何をするかである。

3. 庭園の形式（庭のかたち）

庭園は，江戸時代以前に造園されたものを「古庭園」と呼び，近現代の

庭園序説

庭園と区別される。日本庭園の変遷（飛鳥以前から近現代まで）については、別の機会に譲るとしよう。

(1) 古庭園の形式

古庭園の形式は、次のように分類できるだろう（吉田 2000）。

- ①神苑——岩座・岩境・神池（神聖視された岩や池のことであり、信仰の対象となる）
- ②池泉庭園——舟遊式・回遊式・座觀式（池に水が引き込まれ、滝が落ち、流れがある）
- ③枯山水庭園——平庭式・枯池式・枯流式・築山式（枯山水は池・滝・流れを石で表す）
- ④露地庭園——草庵式・書院式（露地とは茶庭のことであり、外露地と内露地がある）
- ⑤平庭庭園——露地式・枯山水式（起伏のほとんどない、平地に作られた庭園である）
- ⑥総合庭園——総合式・総合風（異なる様式の庭園が融合したり、隣り合っているもの）

伝統的日本庭園は縮景と借景の技法がある。前者は庭園内に自然の風景〔名所〕を模して作られた風景であるのに対して、後者は庭園外にある山などの景色を庭園の一部として取り入れることである。

(2) 和風庭園・洋風庭園

近現代の庭園には、和風庭園と洋風庭園の別がある。植えられる木にも和木と洋木の別がある。例えば、マツやマキは和木であるが、ゴールドクレストやマロニエは洋木である。また、ウメ（特にシダレウメ）とサクラ（特にシダレサクラ）は和風庭園らしさを醸し出すのに対して、バラは洋風庭園に付きものである。和風庭園は自然石を好むが、洋風庭園はレンガやタイルを用いる。意匠の上では、和風庭園は曲線を好み、主な樹木を植

え込む場所は不等辺三角形を旨とする。石組には三尊石・鶴亀石などを配する伝統がある。他方、洋風庭園の方は直線を多用し、庭木を左右対称（シンメトリー）に配列したり、列植したりする傾向がある。和風庭園の露地では境界に柴の枝折戸と竹垣を用いるのに対して、洋風庭園は出入口をレンガかアイアンで作られたアーチを使うのが一般的である。要するに、典型的和風庭園は自然景観式庭園であるのに対して、典型的洋風庭園は整形形式庭園である。

(3) 建物と庭

住宅の場合、建物（庇線で囲まれた空間）を除く残りの空間が庭になる。門まわり・アプローチ（門から玄関まで）・カーポート（車置場）・主庭・プレイガーデン（遊び場）・裏庭（サービスヤード）などに分けられる。ふつう「庭」と言っているのは、主庭のことである。庭の設計に当って、まずはゾーニング（地割り）をすることが重要である。四方または三方建物の囲まれた庭のことを中庭または「坪庭」という。京都の寺院と町屋には優れた坪庭が多い（水野 2007）。上洛の折りには、名園だけでなく、旅館や料亭の坪庭も拝観してみよう。

4. 庭園の構成要素（庭を成り立たせるもの）

(1) 構成要素

庭園は空間芸術であるから、一定の区切られた土地が必要である。その空間に、土・石・水・植栽・添景物などの構成要素が巧みに配置されることによって、庭園が作られる。植栽のためには、できれば①日のよく当る、②水はけのよい、③肥えた土地が望ましい。

(2) 土と肥料

土（特に園芸用の土）は、窒素・リン酸・カリウムを含む肥えた土（黒っぽい土）でないと、樹木や草花の成長や開花・結実が期待できない。窒素

庭園序説



京都の東福寺本坊方丈南庭（枯山水）

は栄養生長を促進し、適量を施すと葉が濃くなり、生長を盛んにする。リン酸は開花結実などの生殖生長や冬越しする作物の根張りに必要である。カリウムは窒素とリン酸のバランスをとる役目を果たす。粘土土や砂礫土の場合には、土壌改良を要する。通常、草花の用土には、赤玉土に腐葉土が混ぜられる。配合肥料を含んだ用土（「花の土」など）を使ってもよい。庭木の植え込みにはバーク堆肥が加えられる。肥料は、施す時期により、元肥（植込みのとき）・お礼肥え（花が咲いた後）・寒肥え（冬・寒中に）の別がある。

(3) 石

庭石は、石組・飛石・敷石などに使われる。石組は、枯山水には不可欠である。「三尊石は高々と、最高無比は須弥山じゃ、滝石組に鯉昇り、陰陽石で子を設け、鶴亀石で長生きし、逢来石で不老不死」（庭斎 2008）とは「庭石のうた」である。飛石は、園路を作るために用いられる。縁から庭に降りる所には、沓脱石を据える。敷石は、畳石・延段とも言い、園路

に敷かれる。池や流れのある庭には、中島・蓬来島・岩島・舟石・出島・石浜・州浜や石橋・沢渡石などの景石が用いられる。石には、形状・節理・野面・色彩と光沢・硬さ・勢いといった特質がある。

(4) 水

水には、流水と溜水がある。流水は湧水・用水から引く。池は流水の方が好ましいが、溜水のこともある。その場合、水をポンプで循環させて、流れを保つことができる。滝は落差のある流水である。池は湖や大海のイメージを作り出す。池にはコイや金魚が放たれる。藻が生え、葉が落ちるので、定期的に水の管理・清掃が必要である。もちろん、植栽への日々の水遣りも欠かせない。

(5) 植栽

植えられる草木のことを植栽という。植栽には、①樹木（タケ・ササ類を含む）と②下草（地被類を含む）と③花がある。

①樹木には、常緑樹と落葉樹がある。前者の例は、マツやカシである。後者の例は、サクラやカエデである。常緑樹には、一年中葉があるが、針葉樹（マツなど）を除き、年に一二度季節の変わり目に古葉が新葉に生え変わる。落葉樹の場合、秋・冬には葉を落とすが、早春までは眠っているのである。常緑と落葉の比率により庭の景観が変わる。常緑樹だけの庭は、葉が常に青々として生命感に満ち溢れているが、季節感に乏しい。他方、落葉樹だけの庭は、開花・新緑から緑陰・紅葉・落葉に至る変化があり、季節感に富む。だが、冬枯れの季節は幹と枝だけになるため、淋しい庭になる。それゆえ、庭に落ち着きをもたせるには、常緑7落葉3の比率が好ましい（清家ほか 1978）。

また、木は葉の形から針葉樹と広葉樹に分けられる。高木になる木の中では、ヒマラヤシーダやメタセコイアが針葉樹の代表格であり、広葉樹ではケヤキが身近かな樹木であろう。木には日向を好む陽樹（エニシダなど）

庭園序説

と日陰を好む陰樹（カクレミノなど）に大別されるが、半日陰を好む樹木（ヤマブキなど）も認められる。どの程度の高さまで成長するかによって、高木・中木・低木に分けられる。高木にはヒマヤラシダ・ドイツトウヒ・ケヤキなど、中木にはツバキ・サクラ・モクセイなど、低木にはツツジ・キャラボク・ヤマブキなどがある。高木は、広い庭にはいいが、小庭には向かない。低木は、下木として使われる。比較的樹高の高い、枝ぶりのよい木（マツ・ハナミズキ・ヤマボウシなど）をシンボル・ツリーにして、庭の中心に植え込む。庭の周囲に美観を損ねるものが見える場合には、目隠しとして常緑樹（例えば、キンモクセイ・カクレミノ）を植えるとよい。

②下草とは、庭園に植えられる植物のうち最下層を構成するものである。そのうち、広い面積を覆うものをとくに地被（グラウンドカバー）と称している。和庭には苔類（スギゴケ・ゼニゴケ）・ササ類・シダ類（ヤブソテツ・タマシダ）・キボウシ・ツツブキ・フッキソウ・ヤブラン・リュウノヒゲなどが使われる。地被類は景石や蹲踞をあしらうためにも使われる。日当りには、シバ・シバザクラ・マツバボタン・セダム（万年草）が使えらる。

③花 庭師は、花の咲く木をハナモノ（サクラ、ウメ、シャラ、ツバキ）、実のなる木（カリン、アケビ、ユズ）をミモノ、葉の美しい木（ソテツ、ヤツデ）をハモノと呼ぶ。草花には、一年草・二年草（越年生草本）・多年草（宿根草）がある。球根花卉は放任栽培も可能だが、綺麗な花を咲かせるためには、毎年植え替える方がよい。花の開花時期により、春咲きのもの、夏咲きのもの、秋咲きのもの、冬咲きのもの別がある。

一般に草花は園芸店で、庭木は造園店で求められる。草花は花壇が最適だが、植木鉢で咲かせてもよい。植栽は、遠近感をもたせるために、地被・下草・下木・中木・高木の順に配植したい。いずれも、植え込み・水遣り・除草・剪定・防除・施肥など、維持管理に相当の労力を要する。

(6) 添景物

添景物は、庭の飾りとして園路の曲がり角や大樹の下などに置かれ、「フォーカル・ポイント」（目線の向う所）になる。次に挙げる物は、日本庭園の代表的な添景物である。

①灯籠（とうろう）は本来蠟燭を点す庭園灯の役割を果たしたが、今では日本庭園に不可欠な添景物となっている。灯籠の素材は石であるが、春日灯籠（立型）・梵字灯籠（植え込み型）・岬灯籠（置型）・雪見灯籠（六角笠・円形笠）などの形式がある（清家 1978）。

②十三層塔・石仏・道標を使うこともある。茶庭には蹲踞（つくばい）が欠かせない。

③その他に蛙・狸・鼻・賤屋（茅葺き家）などがあり、信楽焼の置物が出回っている。

5. 現代庭園の傾向——庭園の交流と多様化

上の3と4は、主に伝統的な日本庭園を念頭においてその形式や構成要素を述べた。だが、現代の庭園はそれだけではなく、異文化間の交流・影響関係が認められ、庭の種類も大いに多様化している。そこで、その様子を典型的に紹介しておこう。

(1) 和風庭園と外国風庭園

現代においても、日本国内には伝統的な日本庭園が多々作られた。例えば、万博公園内の日本庭園（典型的な日本庭園を時代様式別に再現した庭園群）、鳥根県安木市の足立美術館庭園（枯山水・池泉式・茶庭を含む「日本一の日本庭園」）がある。それらに比べれば、重森三玲作庭の友琳の庭（次頁の写真参照）などは革新的な日本庭園である³⁾。個人の庭では、朝倉彫塑館（旧朝倉文夫邸・アトリエ、池泉式中庭）と武相荘（旧白洲次郎・正子邸、雑木の庭）などは傑作であり、主の美的センスが偲ばれる

庭園序説



友琳の庭（吉備中央町舎構内，池泉式庭園）

（岡田 2008）。

他方，外国風庭園としては，英国庭園（例えば，グリーン博みやぎ‘99），オランダ庭園（例えば，長崎ハウステンボス），モネの庭（高知県北川村），コリア庭園（横浜市の三ツ池公園），中国庭園の燕趙園（えんちょうえん）（鳥取県）がある（赤坂 2005）。

(2) 海外の日本庭園

日本庭園は海外でも盛んに作られるようになった。例えば，カナダ・アルバータの栗本日本庭園（京都・無鄰庵の影響），バンクーバの新稲戸記念庭園（ブリティッシュ・コロンビア大学構内にある池泉回遊式庭園），アメリカ合衆国のポートランド日本庭園（カスケード山脈を借景・見え隠れの技法），オーストラリアのカウラ日本庭園（枯山水・池泉回遊式・露地を含む，豪日の植栽），パリのユネスコ本部日本庭園（イサム・ノグチ作庭）（Young 2005 など）。——これらは異文化間交流の点で興味深い。

(3) 住宅の庭の狭小さ

大名屋敷の庭園を現代の一般住宅に求めるのは難しい。一戸建てであっ

でも敷地の区画が狭いため、住宅を建てて屏とカーポートを作ると、ごく狭い空間しか残らない。そのような空間で庭を作るというのであるから、庭園らしい庭を期待するのは無理である。要するに、川柳「安らぎ求むカーポート以上 庭未満」(庭斎 2008)の世界である。

「ガーデニング」と言えば、屏際の小空間に花壇を作り、玄関脇か窓際で鉢花を楽しむ程度である。マンションやアパートの生活では、ベランダ・ガーデンに挑むことになる。その場合、箱庭風の小庭か鉢花のハンギングが一般的である。簾を立てて、鉢植えの朝顔・クレチマス類を這わせることもできる。屋内ならば、水耕栽培の草花か盆栽を鑑賞するに留まる。

(4) 造園空間の多様化

庭園づくりは、様々な空間を利用して行われる。まずは建築庭園。屋上緑化を目的にして、屋上庭園が作られる。葛を這わせて、外壁緑化をねらうこともある。ビルの吹き抜け部分を使って、インテリア・ランドスケープ(屋内庭園)が作られる。もちろん、集合住宅やニュータウンにも造園計画が必要である。道路沿いや中央分離帯に道路造園・道路緑化・街路樹の植林も進められる。市民のために、都市公園、植物園、フラワーパーク、ビオトープ(生き物生息空間)、自然園、テーマ・パーク等が築かれている(赤坂 2005)。

5の(1)(2)(3)(4)のように、現代の庭園は一概には述べられないほど、多様化と異文化間の交流が進んでいる。その大小を問わず、私たちに安らぎと潤いを与えるのが庭である。

以上の庭園序説では、庭園の基本事項(定義・機能・形式・構成要素・現代の庭園)を書き込んだ。読者の庭園鑑賞または作庭への一助となれば幸いである。

庭園序説

註

- 1) 吉備創生カレッジとは、岡山県大学コンソーシアムによって企画・運営されている市民講座であり、この3回シリーズの講座は中国短期大学が提供したものである。従って、同短期大学の橋内幸子との共同担当という形式を採った。そのうち、第1回と第2回は主に橋内 武が講じ、第3回は主に橋内幸子が話した。いずれの講義も用意したレジユメに従って進めたが、DVD「日本の庭」(ユーキャン)の視聴や庭園写真などの投影を加えたものであった。
- 2) 重森三玲の生涯と作品については、橋内(2008)を参照。

参 考 文 献

- 赤坂 信編. 2006. 『造園がわかる本』, 影国社. (公共的・施工的観点を含む)
- 岡田憲久. 2008. 『日本の庭ことはじめ』, TOTO 出版. (庭は自然を扱う意匠)
- 清家 清・工藤昌伸監修. 1978. 『作庭の事典』, 講談社. (作庭ハンドブック)
- 京都林泉協会. 2002. 『日本庭園観賞便覧——全国庭園ガイドブック』, 学芸出版社.
- 進士五十八. 1987. 『日本庭園の特質』, 東京農業大学出版会. (著者の学位論文)
- 進士五十八. 2005. 『日本の庭園——造景の技とところ』, 中公新書. (庭園入門書)
- 橋内 武. 2008. 「書評 Tschumi, Christian, *Mirei Shigemori—Rebel in the garden*」, 『桃山学院大学経済経営論集』第50巻第1号. (重森三玲論)
- 水野克比古. 2007. 『京都坪庭拝見』, 光村推古書院. (寺院と町屋の坪庭写真集)
- 庭斎. 2008. 「撫川のうた」『桃山学院大学人間科学』第35号. (詩集)
- 吉田徳治. 2000. 『古庭園の観賞と作庭手法』, 農業図書. (説明が詳しく学術的)
- Young, David and Michiko. 2005. *The Art of the Japanese Garden*. Tokyo: Tuttle. (日本庭園史)
- 写真3点(重森三玲作庭)のうち、福智院庭園と東福寺本坊方丈南庭は筆者の橋内が写したもの、友琳の庭はリーフレット「永遠のモダン——重森三玲の軌

跡」(吉備中央町刊)による。